

ももよぎくいろのよのなか
百夜菊色の世中（檜垣）

へ五蘊仮に形なし 閻浮に通う関寺や 人も咎めぬ老いの身の 恋に迷いし
魂よばいへ朝に一鉢を得ざれども 求むるに能わず 色にかまけてこの年月
を恋しくと殿御を恋いて 終に一夜の契りさえ 許さぬ仲の情なや

へ終には老いの鶯の 古枝に帰る道もなきとよ 我とわが身を白川の 水は
ぐむ へ姿恥ずかし影ぞ懐かし 恋せし人を寝取られて 枕一つの物憂さに
よろばいながら来たりしぞや 恨めしや 恨みながらもいとしさは なお深
草の花すすき 露も起き居に忘れられず これまで参りさむろうぞや

老女へ百年に一ト年足らぬ九十九髪 われを恋うらし佛に立つ

小町へ百年に一ト年足らぬ九十九髪

少将へわれを恋うらし佛に立つ・・・ハテ合点のゆかぬ この歌を口ずさみ
しは何者じゃ、ヤヤそれに佇みおわするは 某弱冠のみぎり 先帝

仁明天皇御惱平癒祈願の為 兄興風殿に付き参らせ 近江の国多賀明
神へ参詣なす 頃は嘉祥三年文月七日 未だ残れる暑さ強く 路地の砂
をも焙ずるばかり その暑を避けんが為 江州関寺の門前にて 水やあ
ると乞いしかば とある内より老女立ち出で我に水を與えし其の時
の老女 もはや年経て十年あまり よもやとは思えども 生死存亡計り
難し それかあらぬか身の上を この興則へ明かし召されい

老女へそんならそれをお忘れのう

少将へ如何にも興則 覚えて居る

老女へアアうれしや嬉や それを覚えていさしやますからは 何しに身の上
を包みましよう その時関の清水を汲んで参らせし檜垣の老女は

わらわじゃわいのう

少将へオオそれく 思い出すもひと昔 そのときの檜垣の老女であった
かいのう

老女へまだその時貴方様は 侍従之助興則様とて イヤモ可愛らしいお稚児様

少将へ今は官位も四位の少将

老女へあの藤原の興則様

少将へそもじは今は今に年経れど

老女へその折からの檜垣の老女

少将へ不思議にめぐり逢坂の

老女へ関の清水を掬びしも

少将へ深い縁で

兩人へあつたよのう

少将へときに老女尋ねたいは あの江州関寺からはるく遠いこの郭へは
どういう事でござったぞ サその訳は

老女ヘンーサそれは

少将へどうじゃ

へ問われて云うも恥ずかしや その文月に逢坂の 関の清水に影とめし月
の雲井の御方を ふっと見初めて恋い焦がれ この年月の物思い 明日をも
知らぬ老いの身の 仏三昧取り置いて 結ぶの神に手を合わせ 後生の為の
念仏も 数珠にはあらで愚痴を繰り せめて一夜さしつぽりと 抱いて抱か
れて寝々するならば それが未来の土産ぞや 情けじゃ慈悲じゃ善根じゃ我
が恋叶えて給われと 水に皺寄る涙川 白髪 of 雪や解けぬらん

少将へ数ならぬ身のこの少将 殊に当時は世を忍ぶ身の上 あるに甲斐なき

某を さまで執心との志は嬉しけれど 年にも応ぜぬ老女が願ひ かり

そめに言葉を交わし手に手を取りしこの首尾を 初音の今日の思い出に
さあく早う関寺へ帰って下されい あれくあれは確か越し方にて

聞きなれし

へ浅草寺の鐘の 声 や八声も告ぐる山葛 浅間になれば恥ずかしの 森の木
隠れ世もあらじ

老女ヘイヤくどの様にあるうとも 少将様のお側には この檜垣のおば

が侍らにやならぬ 其方はどちへなりといて下されい その古は我

とても逢坂山の関寺へ 辛くも人に捨てられしが 今又人を捨つるも

恋 せめてはおばが形見をやろう コレくこれはわしが手馴れし

杖と笠 少将様じゃと思うて 大事にかけて持って行きや

小町へこりや又あんまりじゃわいなア 身は関寺にありながら 年甲斐

もなき横恋慕 言い交わした自らを 恋の山路へ捨つるのか

老女へ如何にも山は老女が住家

小町へ昔に帰る秋もなく

少将へ月のとも人惑いして

老女へ今宵はそなたも独り寝しや

小町へ女夫の仲を更科や

老女へ時にとつての姥捨山 サ行かぬか
エエ行きおらぬか

へ盛り老けたる女郎花 露の袂をしおたれて 晴れて逢われぬ因果同士い
つか雲井に澄む月の 都の昔慕わしくそなたの空と眺めしがへしかるに月
の名所 いくは在れど更科や わけて添い寝の明石瀉 心も須磨の恨みさ
え 堅い石山打ち解けて 曇らぬ仲と誓いしを 今宵の雲に隔てられ 又も涙
の雨もよい 笠傾けて伏し沈む

少将へコレ小町御前 思いも因らず胸を痛めて苦しゅうてどうもならぬ

水一つたも

小町へアイく

老女へアアこれく 我が身にや汲まさぬく 今も昔の影とめし

関の清水を憂き人に いぎく 汲んで参らせん

へ置き手拭に前垂れ襷 小桶抱えてしやならしやならと 腰は柳か老曾の
森か 箒木がありとは三重の抱え帯 底澄む水を汲もうよく 向う釣
瓶の水鏡 へのう浅ましや 我とわが身を苦しむる呵責の罪 水は忽ち炎と
なり 猛火の釣瓶に熱鉄の 桶もさながら三ッ瀬川 冥途の責めを眼のあた
り 震いわななきくるくくく へあら堪え難やと身を悶え かつぱと伏す
と見えけるがへこの苦しみも誰ゆえぞや 思いも深き深草の その仇人を恋
焦がれ へ枕交わさぬ執着心 絆に繋がれ纏われて 刃に掛かりし亡骸の 魂
魄 これまで来たりしぞや

老女へうらめしやな おことを深く思い染め 此処や彼処と彷徨う中

立烏帽子とやらが邪慳の刃にかかりしも これ皆汝が故なるぞや

小野小町とも添わさぬく 共に奈落へ連れて行き 思い知

らせん思い知れ

へ思いは山のかせぎにて 招けど更に留まるまじ さらば煩惱の犬となって
七重の鎖は切れるとも 未来永々生々世々 付き纏いゆく玉蔓 梢をしのぐ
木枯しや 雨か木の葉かばらくくく さらさらさつと恋風 山風 はやち風
昔を今に吹き返す 小野照崎や小町塚 江戸の名所と栄えける